
血盟 一血の定め一

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血盟 ― 血の定め ―

【Nコード】

N2102R

【作者名】

蒼

【あらすじ】

飛び膝蹴りでリング争奪戦に乱入してきたのは赤茶の髪の子
！？

どたばた活劇、ここに開幕！！

一発目 乱入は大胆にするもの……？

「その忌々しい才能と共に!!」

レヴィ・ア・タンがランボを踏みつけようとした瞬間、

「何してんだ!! このブスデカリンチ野郎!!」

そんな事を言いながら少女は飛び膝蹴りをお見舞いした。

「なっ……」

レヴィの体はよろけた。

少女は着地し、ランボの前に立った。

「子供相手に何してやがるんだ!!」

少女は叫んだ。

「……貴様には関係無いことだ。」

「どこが関係無いって? ここに入ってる時点で目撃者だ。それに、悔しくないんだ。私なんか蹴られて。」

少女は怯まずに挑発する。

「何をっ……」

そんなやり取りがされるなか、ボンゴレサイドでは戸惑いが隠せられていなかった。

「……何者なんだ……」

そう呟いたのはリボーン。

「リボーン!! 何か知ってるの!?!」

「いや。」

沢田綱吉の言葉にリボーンは首を振った。

「誰なの!?! あの子!?!」

「御待ちください。あなたは誰ですか?」

綱吉と同時にチェルベッロが少女に問いかけた。

「私は……杉原。杉原世那。中二です!!」

少女――世那はチェルベッロに振り向きながら言った。

「お立ちのき頂けますか。試合の最中なので。」

「それをさせないようにしてるんだよ。誰が退くかよ……………ん？」

世那はふとレヴィの首を見た。

そしてランボの頭を見た。

「(同じ…………指輪?)」

世那はランボに近付いた。

「これを賭けてるんだろ?…………なら…………俺がやってやるよ。」

その瞬間、世那の手に稲妻が走る。

世那はそれにも気づかないように、レヴィを見据えていた。

「!!!!!!」

それを見た家光が反応して、チエルベツロに叫んだ。

「今から、雷の守護者を彼女、杉原世那に変更する!!!」

「…………あちら側から申し出ありましたので、子の試合は無効とします…………再戦はまた、抽選で行いますので悪しからず。」

そう言つてチエルベツロとが消えた。

それと同時にぐらいにヴァリアーのメンバーも消えた。

「…………つまんね。消えやがった。」

世那はふてくされて呟いた。

「帰ろ。ロードワークの途中だし。」

世那は屋上の柵を飛び越えようとした。

「!!」

その瞬間、殺気が突き刺さった。

「…………お前は何者だ。」

「物騒なもの下げてんな。赤ん坊なのに。」

世那は正面を見たまま(…………)言った。

「…………何で解った。」

「…………感覚。あと、近付いていないから、遠距離から狙うとしたら、弓矢か拳銃かなって。」

「(もう、次元が違うーっ!!)」

リボンと世那の会話に綱吉は突っ込んだ。

「…………何時か解るよ…………」

「あっ!!」

世那がそういった瞬間、世那が落ちた。
それを見て綱吉は目を丸くした。

「逃げた……か。」

「ええ!？」

「生きてるんすか!？」

ごもつともな突っ込みをどうも。

二発目 転校初日は質問がウザイから全力でスルーで（前書き）

杉原世那

大阪生まれで7歳で愛媛に転校し、14歳で並盛中学校へ。
首に切り傷がある。

手には常時グローブがついている。

運動神経抜群で戦闘能力も抜群。

髪の毛は赤茶で、ショート。胸は並。

身長は161cmで体型は普通。

二発目 転校初日は質問がウザイから全力でスルーで

「ボロボロや……」

世那が呟いた。

世那が目の前に行っているのは、並盛中学校。

「なのによ……何で気付いてへんねん……日常やないか……日常過ぎやで……」

世那の前には普通通りに通学する生徒の姿だった。

「……あ……職員室何処やろ……」

……肝心なことを忘れていた世那だった。

??????

「愛媛県から転校してきました、杉原世那です。」

世那は普通に挨拶をした。

「にしても、空席多いな……」

世那が呟いた。

「こら、杉原。自分の席に着け。」

「俺の席、どこですか？」

世那の突っ込みにクラス中が笑った。

「あ、笹川の隣だ。」

「それ、肝心っすよ。それ。空中椅子で授業受けなあかんのすか？」

世那の担任の揚げ足をとった発言にクラスはもっと笑った。

「早く座れ。」

「はーい!!」

世那はさつさと席についた。

「よろしゅうな、笹川さん。」

世那が軽く言った。

「あ、私の事は京子で良いよ!!」

京子が笑顔で言った。

「あ、うん……京子ちゃん……で良い？」

世那は難しそうに聞いた。

「うん!!」

京子は笑顔で言った。

「んで、気になったんやけどな……欠席多いな……なんかあったんか？」

世那が京子に聞いた。

「ツナくんと獄寺君と山本君のこと？」

「……名前出されても解らんで。」

世那が華麗に突っ込んだ。

「そうだね。」

京子はハハと笑った。

「（まさかの……天然なん……？この子……）」

そんな一方、世那は目を丸くしていた。

そんな一日。

今夜はあの……銀髪君（↑名前知らないから第一印象で。）の試合。

三発目

「どうも!!今って……ギリ?」by世那「一言目がそれーっ?!」

緊迫した空気の中、世那はツナに話しかけた。

「どうも!!今って……ギリ?」

「一言目がそれーっ?!」

ツナが全力で突っ込んだ。

「……まだ選手が来てへんのかいな……もっと寝れたな。」

「(さっきまで寝てたの!?)」

不眠で来たツナ達には羨ましい限りだ。

「……!!」

世那は素早く振り向いた。

その瞬間——時計が爆発した。

「お。」

「お待たせしました、十代目!!獄寺隼人……行けます!!」
後ろには獄寺が立っていた。

「……獄寺……?……あーっ!!」

世那が行きなり大声をあげた。

「ど、どうしたの?」

「どうしたんだ、杉原?」ツナと山本が世那の方を向いた。

「……もしかしてさ……ツナくんと……山本君……?」

「うん……そういえば自己紹介してなかったね。」

「そう言えば……」

ツナの呟きに山本が反応した。

「あー……成る程ねー……」

世那が頷いた。

「(だから居ない訳か……)」

「で……どうかした?」

ツナが世那の顔を覗き込む。

「まあ、これからよろしくってこと♪」

「…今話すことかよ。」

世那の言葉に獄寺が小声で突っ込んだ。

「まあ、獄寺君も……」

と世那は獄寺に近づいた。

「来た時点で戦闘は始まって……視野は広く……な……」

「てめえに何が解るんだよ……」

「戦闘時に気を抜いて、頸動脈を切られかけたから、私の二の舞にならないようにね。」

ナイフ使いだからねと世那は獄寺の背中を叩いた。

「……たりめーだ……十代目に恥かけられっかよ……」

獄寺はツナたちの方へ行った。

「……それが怖いんだよ……」

世那は一人で呟いた。

「それでは戦闘フィールドの説明に参ります。」

長髪の女の人（世那談）が説明し出した（が長いから箇条書きへセナメモ）にて説明）。

〈セナメモ〉—————

嵐戦

フィールド：校舎三階の全て

ただしあらゆる所にハリケーントービンが仕掛けられて四方向から風が出る。しかも時限爆弾つき。時限爆弾は試合開始15分後に爆発する。

そこまで世那が書いた途端、長髪の女の人のアソコを男の人が……

「（あ、膝打ち食らった。）」……そーです。

んで、世那は握りこぶしに力を入れる準備をした。

「ってわけでオレこっちつくから、よろしくな喪服の連中……」

…お、こっちにも……」

「死ねえ！！エッチ野郎おお！！」

世那が思いつき殴った。

「何してんのー!!」

そんなツナの言葉を尻目に世那はシャルルの足を持ち、ひこずって自陣に入れた。

「ん？自己防衛。」

「過激だー!!」

ツナが突っ込んだ。

「よし!! それでは勝負前にいつものいくぞ!!」

良平が吊っていた腕を振り上げて言った。

「なあ!!」

「……何なん？それ。」

獄寺は過剰に反応し、世那は首をかしげた。

「ちよっ…待て、いらねーよ!! んな恥ずかしーもん!! オレの勝負に円陣なんていらねー!!」

獄寺が必死に避ける。

「円陣……か」

世那が少し、ほんの少しだけ悲しそうに微笑んだ。

「そういわずに…や…やんない？獄寺君……」

「なっ」

ツナの言葉に獄寺が驚いた。

「な……なんていうかさ……うまく言えないけど…この勝負はみんな繋がっているって言うか…誰一人欠けてほしくないから…しっかりと団結した方が……良いつて言うか……」

「十代目…そこまでファミリーの事を……自分わかってませんでした!! やりましょう!! やらせて下さい!!」

獄寺がツナの言葉に頭を下げた。

「う…うんやろっか…」

「はい!!」

「世那さんも…」

獄寺に続きツナは世那にも聞いた。

「世那でエエよ。さん付け、キモいし。やろか、円陣！…つか、オレが入ってもエエんか？ほんまに……」

「……関西弁？」

ツナが目丸くしながら言った。

「ああ。関西方面から来たんや。」

「へー…」

世那の説明にツナが頷いた。

「まあ…やろや、やろや！！」

「あ、うん。」

世那が円陣に加わった。

加わりながら……一言。

「（今さらかいな。）」

世那がそんなことを思いながらツナ達の会話を聞いていた。

「こいつも入れてやれ」

リボーンがツナに何かを投げつけた。

「……？なんだこれ…？」

「それは昨日の戦いでちょん切れたアホ牛の尻尾の布だ…」

「！ランボ…」

「それを見てると思い出すなあアホ牛の在りし日の姿を」

「死んじゃったみたいに言うなよー！！」

その瞬間、世那は座り込んだ。

……シャマルの上に。

「良かった……生きてたんだ……良かったあー……」

世那がうつむいたまま呟いた。

「…世那？」

「いや……何かほーっ…としてしても……ワリィ。すぐ立つから。」

世那はすぐに立ち上がった。

そして、円陣を組んだ。

「獄寺ーファイッ」「」「「おー！！！！！！」「」「」

「それでは両者中央に来てください。」

円陣が終わるのを待っていたかのようにチエルベツロが声をかけた。
「右腕に恥じぬよう戦ってきます!!」

「え…あ…う、うん…で、でも…無理しないで…」
見送った途端、赤外線関知式レーザーが通った。

「爆弾使うんだって? って、見りゃわかるか…」

不意に敵が獄寺に近付いた。

「……んのバカ。」

世那が舌をうった。

「肩に力が入りすぎじゃね?」

敵が獄寺の肩に手をおいた。

「何が『たりめーだ…』だ…真っ直ぐすぎじゃねーか…」

「どうしたの? 世那。」

世那の呟きにツナが反応した。

「あ…いや…別に。」

世那は首を振った。

「……なら良いんだけど…」

ツナは何かありげな口調で言った。

「それでは嵐のリング……ベルフェゴールVS獄寺隼人……勝負開始!!」

初っぱなに、ボム一発。

「短か。」

世那は呟いた。

爆発音と共に、爆風が煙が立ち込める。

「煙幕代わりにして何うか……しかし……(術中にハマっている間には勝ち目は無いぞ……)」

世那は画面を見据えた。

獄寺の上空には輪の形になったナイフが待ち構えていた。

「……野郎お…嫌な攻撃しやがって…まるで魔法やな…やけど、種が解れば簡単や…」

世那が呟いた。

「……お前には分かってんのか？」

リボーンが世那に聞いた。

「……タネはな。」

「……………」

世那の言葉にリボーンは世那の只者の無ささを感じていた。

「あ、面白くないから言うなよ？」

「……………ああ」

……そしてこの無邪気すぎることも。

四発目 『……完治したら一発殴らせろよ。』by世那『な、何でだよ!!』

獄寺は悪戦を強いられていた。

「気流の流れを読むなんて…そんなこと…」

「不利だと思われる状況を逆に利用してこんな人間離れたことをやってのけちまうんだ……認めざるをえないな…奴は本物の天才だ…」

そんな中、世那は……

「…確かに天才だな…ある意味の…ふわああー……」

呑気に欠伸をしながら言った。

「世那……何でそんなに落ち着いていられるの？」

「……言えるのはただ一つ……」

「へ？」

ツナの質問に世那は黙殺して、関係無さそうな事を言い出した。

それにツナは目を丸くした。

「このトリックを解き明かさない限り……勝利は見出だせない……」

解き明かすには……俺の言葉を思い出せ、獄寺——……」

画面に映る獄寺に世那は視線を向けた。

「あのナイフと正面向いてやりあうのは分が悪い……トラップ張って死角からチャンスをうかがうしか……」

その瞬間ダイナマイトが切れた。

「な!!!? どっから来やがった!!!」

獄寺が辺りを見渡すが敵はいない。

考える間もなくナイフが飛んでくる。

「うぐっ」

「うしし…もう大当たり? 嵐の守護者がこれじゃあ、お前のボスも知れてんな…」

「!!!!!! (オレのせいで十代目が——…)」

その獄寺の変化に世那は気が付いた。

そして不適に笑った。

「……突破口はじきに見つかるな。」

世那が呟いた。

「怒濤の攻めのシメは針千本のサボテンにしてやるよ。」

「良かったな。理科室で……」

「え？」

世那の呟きが聞こえたツナは思わず聞き返した。

「あ、いや……攻められる側の終演がそこで運が良かったなってな……」

「……え？」

「バイバイ」

ツナとベルの声がもろ重なった。

ナイフはしっかりと刺さり、窓を突き破って出てきた。

——針千本になった人体模型が。

そして動いた。

「ひい！動いた！！」

「バカよく見てみる。首に何かからまってるぞ。」

ツナとりボーンのやり取りを聞きながら世那は欠伸をした。

謎を解き明かした後の勝負は五分五分だった。

新技や知恵で攻める獄寺に、我を失い自我が崩壊している天才のベル。

そんな戦いにも決着がつき、時間は残り三分——なのだが。

「氣い抜くんじゃねえ！！獄寺あ！！」

異変に気づいた世那が目一杯の声で叫んだ。

最後の意地でベルが食らいついたので。

そして——爆発が始まった。

出血による体力の低下がベルをふれきれずにいた。

そして苦肉の決断——

「リングを敵にわたして引き上げろ隼人!!」

「……それが無難………だが」

シャルの言葉に世那が小声で突っ込む。

「こんなもんでくたばるなんてバカげてる!! 戻れ!!」

「ふざけんな! 俺が負けてみる! 一勝三敗じゃもう後がねえ!! 致命的敗北なんだ!!」

シャルの説得に獄寺が反論する。

「……役に立ちたい意地でそうしない。」世那は見透こしたように呟いた。

「(同じだ…あのときの私と…)」

世那は画面を見据えた。

「これで戻ったら十代目の右腕がすたるんだよ!!」

獄寺は大声で見栄を張った。

「馬鹿野郎っ!!」『テメエには名誉や何よりも大切なものがあるだろうが!! 名誉なんてくそくらえだ!! 大切なものを壊さないために自分を守れ!!』獄寺あっ!!」

世那が思いつきり叫んだ。

「獄寺!!」

「タコヘッド、戻ってこい!!」

山本と了平が叫ぶ。

「図書室まであと残り二十秒です。」

チェルベッロが非情に時間を告げる。

「隼人!! 修行に入る前に教えたことを忘れたのか!!」

「……ここは死んでも引き下がれねえ!!」

獄寺がそう叫んだ瞬間だった。

「ふざけるな!!」

その瞬間、獄寺の動きが止まった。

「何のために戦ってると思ってるんだよ!!」

「!!」

獄寺の目がハッとする。

「またみんなで雪合戦するんだ!! 花火見るんだ!! だから戦うんだ!! だから強くなるんだ!! またみんなで笑いたいのに…君が死んだら意味がないじゃないか!!」

ツナが必死に叫んだ。

死んで欲しくない気持ちちが世那にも伝わった。

「……………十代目…」

その瞬間機械音が——爆発音が支配した。

「……やっぱり…効くのは“十代目”…か……」

世那には見えた。

画像が途切れる瞬間、リングを獲られながらも——“生”を選んだ獄寺を——

「あそこみろ」

リボーンの声に黒煙の方を見ると獄寺が歩いて出てきた。

「赤外線センサー止まってるぞ。」

「獄寺君」

「獄寺!!」

「タコヘッド!!」

シャマルがそう言った途端、山本、了平とツナが獄寺に駆け寄り、世那は後ろから歩いて近寄った。

「すいません…十代目……リング獲られるってのに花火見たさに戻ってきちまりました…」

獄寺が倒れ込んだまま言った。

「よかった……獄寺君…本当に…良かった…!」

「な! オレ負けたんすよ!!」

ツナの言葉に獄寺が顔をあげた。

「よお。この馬鹿。緊張しすぎて、忘れやがって……」

世那は獄寺の側にしゃがみこんだ。

『来た時点で戦闘は始まってる……視野は広く…な……』

世那は予測していた。

経験で悟っていた。

——自分がやられた事だから。

「頸動脈やのうて、腹で良かったな。斬られて死ぬところじゃあるまいし……これで済んで良かったな。」

「——お前は何者だ。」

獄寺はそう聞いた。

最初の時の身のこなし。

今回の助言。

本能は告げていた。

“何者だ”と、漠然と。

「……まだまだ未熟やからな……教えられへんな……知りたいんなら、もっと強うなれ……そしたら……教えたるわ……俺の事をな……」

世那は獄寺の耳元で囁いた。

「一勝三敗……か……」

世那が立ち上がって呟いた。

「山本……」

獄寺が山本の服を掴みながら立ち上がった。

「後……頼むぞ」

「ん？」

「オ、オレだっておまえになんか頼みたかねーんだよ………よりによっってお前なんか……」

「わーってるって。」

その瞬間、獄寺の体がゆらいた。

「……痛っ」

「………完治したら一発殴らせろよ」

「な、何でだよ!!」

獄寺は気付いていないが世那の胸の谷間に落ちたのだが、『痛っ』と言われたためショックだったからだ。

そして——

「明晩の対決は——雨の守護者の勝負です。」

——決まった。

五発目

『……彼奴の何処が怖いの?』b y世那『ええええええええ!?!』b y

「……そういえば、雨の守護者って?」

「……今さらかよ。」

そんなこんなで雲雀が到着。

「……………誰?」

世那の呟きに構わず話は進む。

「ヒバリさん：来てくれたんだ!! 本当にリング争奪戦に加わってくれるんだ：あの最強のヒバリさんが：」

ツナが感動したように言った。

「校内への不法侵入及び校舎の破損：連帯責任でここにいる全員噛み殺すから。」

雲雀がトンファーを構えた。

「なっ：俺たちもかよ!!」

「あの人校舎壊されたことに怒ってるだけだー!!」

「あいつ本当に学校好きな」

獄寺、ツナ、山本が口々に言った。

世那の結論は――

「……極度の自己中なのね。」

「何か言ったかい?」世那の呟きが運悪く雲雀に聞こえた。

「うん。」

「わーっ! なにいつてんの、世那!!」

世那の真っ正直な答えにツナが急いで止めた。

「……彼奴の何処が怖いのか?」

「ええええええええ!!」

世那の爆弾発言にツナはまたもや驚いた。

「……面白いね：君。」

雲雀が世那に向けてトンファーを構えた。

「……やろうか……？」

世那は不意に窓に近付いた。
そして――

「――外のグラウンドで……」

直ぐそばの窓を開けた。

「お、お待ちください…：守護者同士の戦闘は……」

「仲間同士なら良いじゃない。」

チエルベツロの指摘を世那が一蹴した。

「“明日は雨の守護者”が決まったら、もう用事的には終わりですよ。先に失礼します。」

そう言って世那は窓から飛び降りた。

「ま、またあ!？」

ツナが窓の下を見下ろした。

「早く来いよー“ヒバリさん”……………」

世那が下から叫んだ。

そして雲雀も――

「えええええええ!？」

飛び降りた。

ちなみに驚いたのはツナである。

『……知りたいんなら、もっと強うなれ……そしたら……教えたるわ…：俺の事をな…』

「……………（もっと…強く……）」

獄寺は自分の手を見つめた。

「っっていうか獄寺君治療しなきゃ!!」

ツナが飛び付いた。

「これぐらいか擦り傷っす」

獄寺も笑顔で返す。

「ドクターシヤマルに診てもらったら……」

「オレ男は診ねーから。」

バジルの提案を本人が一蹴した。

「え、っ!!?」

「あーゆー人なんだよ。」

驚くバジルにツナが付け足した。

「すいません十代目…肩…貸してくれませんか……?」

「え?」

獄寺の声にツナが振り向いた。

「杉原を……杉原の戦う姿を見ておきたいんすよ……」

獄寺の圧しに負け、ツナは肩を貸した。

「無茶しないで……?」

「……解ってます。」

下にはガウンを脱いで袖無しに短パンの世那に、トンファアを構えた雲雀が立っていた。

「……武器は無いのかい?」

「ああ。良いぜ。かかってこいよ。」

世那は仁王立ちで挑発する。

(隙だらけ……これなら……)

雲雀が直撃させようと振るったトンファアは――

「!!!!!!」

――空中を切った。

「オレにはカスって無いぜ?」

「……面白い」

ヒバリのトンファアから棘が出てきた。

「おーおー……豪勢だ事。」

世那は棒立ちになった。

「!!!!!!」

雲雀がびく付く。

見ていたヴァリアーやいつの間にか来ていたディーノや獄寺もゾクリとした。

「……どうしたの? 獄寺君?」

一同は世那を見ていた。

そして同時に思っていた。
強い

と――

「っ――!!」

雲雀がまたも動くが、世那は――消えた。

「な――」

「遅い。」

ガスッ!!

世那の手刀は雲雀の首筋を捉え、雲雀の動きを封じた。

その動きはまさに、瞬間移動。

人に出来るものなのか――?

「ツナー!! これで良いよな? 怪我はさせてないし、してないぜ
ー?」

「う、うん!!」

世那の言葉にツナは頷いた。

「リボーン……」

「いつの間に来てたんだ? ディーノ。」

リボーンは振り返った。

後ろにはディーノがいた。

「珍しいな。気配に気付かないなんて。」

「……用件は何だ。」

嫌なところを付かれ、話題をすり替えた。

「あいつは何者だ。」

ディーノは単純明快に聞いた。

「守護者だ。」

リボーンも単純明快に答えた。

「素性は?」

ディーノのその問いにリボーンは顔を曇らせる。

「……何一つ解らねえ……巧妙に隠してやがる……」

リボーンの言葉にディーノも顔が真剣になる。

「大マファイア、ボンゴレを相手にか……」

「ああ……」

ディーノの言葉にリボーンも頷いた。

「……食えねえ奴だな……」

「……………」

ディーノの言葉にリボーンは沈黙したままだった。

その後、ツナたちが話し出した頃合いを見計らい、世那は帰り、雲雀には風邪を引かないようにガウンをかけた。

リボーンの姿は何処にも見当たらなかった。

五 発目

『……彼奴の何処が怖いのか?』by世那『ええええええええ!』by

次はたぶん丸々オリジナル！！

六 発目

『人間じゃないって言ったら、満足か?』b y 世那 (前書き)

短い。

六発目 『人間じゃないって言ったら、満足か?』 b y 世那

不審に思うものは多かった。彼もその一人だろう——……………

世那はただ歩いていた。

そして、不意に止まり笑った。

「……………チェックメイトだよ。赤ん坊。^{リボン}ここまでだ。」

「……………バレてやがったか。」

電信柱から出てきたのはリボンだった。

「……………質問は?」

「おまえは何者だ。」

「……………真っ直ぐだねー。恐ろしいくらいに。」

世那は半ば呆れながら言った。

「……………すべこべ言わずに答えろ。」

「人間じゃないって言ったら、満足か?」

「な——」

何かを言おうとしたら世那の回りを風が取り囲んだ。

「……………ちっ。」

世那の姿はこつぜんと消えていた。

そして、ある人物は信じられない光景を見る。

「あれは………水龍！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2102r/>

血盟 一血の定めー

2011年10月8日18時10分発行